



大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和7(2025)年
12月号
通巻664号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和7年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



大倭会一泊文化行事の香川県白峯御陵前で(文・4、5頁)

昭和54年11月14日の対談の再編集版(当時、法主満68歳、竹内氏満54歳)

頭幽一如の世界(4)

対談：法主 矢追日聖×竹内敏晴

霊動のエピソード

竹内 敏晴さんは演劇や教育などの分野でユニークな活動を展開された方ですが、今回再度プロフィールを3頁に紹介しておきます。(編集部)

竹内 霊動ですが、それに気づかれたと言うかご自分で体験なすったのか人に起こるのを見られたのか、それはいつ頃ですか。

法主 私がこの山に入った時、ついでに連中にわりと皆に、起こってましたよ。竹内 という、ここに入られてからですか。

法主 私自身は、ある程度、霊界人との交流がありますから霊動は起きないんですけど。まあ、私はちょうど昭和19年、33歳の春頃まで東京におったんですよ。その時でももう18年に私に命令があったんです。郷里へ帰って百姓せえ、死ぬまでするつもりでかかれ、と霊界から言われたんですわ。宗教よりこの方がええわと思うて喜んで帰って来て、それから初めて農機具から始まって車や牛まで全部買いました。畑や田は小作人が返してくれましたけど、旦那はん頭おかしいなつたんと違うか、て笑われました。

その時は、18年の12月にそういう霊示があったんです。特殊な例ですけどね、姿とか相で見せてくれる場合は、東京の空襲見せてくれるんですよ。まだ東京は1回も空襲が無かった時にです。朝、拝

んでたらパツとビルや東京の街が出るんです。眼あけたりふさいだりするけど、どう考えても東京やと思つて見とつたら、飛行機が密集して集団で出て来るんです。私の見たところでは黒い飛行機の姿が見えてましたわ。B29みたいなピカピカしたんやなしにね。そして、焼夷弾落としよる、下がパーツと燃え上がる。そしてそれがそのままスーッと立ち去って、しばらくすると、また集団で来るんですわ、波状的に。あつちから燃えるこつちから燃えるこね。

隣組で防空演習ちゅうのやつてましたわな。私がつちの班長でしてん。30ちよつと出た位で、年は若かつたし。

竹内 それで戦争に行つてないというのは珍しいですね。それでは班長にされるわ。

法主 近所の防空壕掘りは殆ど手伝うてました。大久保百人町におつたんですが、主人が留守というようなところ多かつたですから。関東の石の無いようなローム層やから柔かい。ここへ焼夷弾落ちたらどないして消す、とか、一つ落ちた事を設定して、毎日バケツリレーしてやつとんねん。

まあそんな事でしてん。それが今言うように集団で来て、パツと落とされたらもうそこら界限、火の海やからね。何とまあ毎日こんな阿呆なことばかりやらしよんねんなどと密かに思つたんやけども、大和に帰って百姓せえ言われるし、それからその始末して……。

私、その時、文部省関係の財団法人を主宰してましてん。神様をお祀りして社会教育をするという目的で、ちよつと特殊なものでしたが、そんな会を主宰しとつたもんやから、いろんな所から修養に来る人がおつて、その頃に靈動した人がよくあります。

それからまた話は戻りますけど、昭和16、7年

頃やつたと思うんやけども、社会教育の講習会がありましたね、いろんな部類の先生がいやはつて、私は何か知らんけど宗教の方の持ち場で、それで5、6人の講師が揃つて、北海道へ行つたことがあります。始め根室で、公会堂みたいな所に100人以上の人がおりましたね。浜に出て仕事する人やトラックの運転する人とか、ごつい人が多かつたですわ。

竹内 私の母が育つた所は根室のそばの厚岸です。

法主 そこで私が宗教の話をする時に、質問があるから靈魂の話やかしとつたらね、もう7、8人がパーツと発動してきましてん。そしたらそこいらの人たちが氣狂い起こつたとびっくりしますんや。今度は、これは一体何や言うて質問してきますわね。そうすりや説明したらなあかん。そんなことやつてたら、また増えますねん(笑)。あんな雰囲気いうのはうつりよんねな。そしたらあんなばい講習会では無くなつて、毎日、私の靈動の話ばかり聞きたがりますねん。

私たちの宿をしてくれてる家は散髪屋さんか何かの2階でしたけどね、会場の方で皆、靈動やつて待つてますねん。そして1人が、「あ、先生今、来た」と言いよんねん。と、誰かが見に走る。もしたらちよつどその時間が合うんですね。ああいうような時は妙に分かるんやね。

そんなんで、全体を一応おさめるのにかなり難儀しました。そこから帯広に行った時に、皆、仕事放つといつて来ますねん(笑)。それでまた汽車の中でやりよる。お前ら仕事忙しいのに何しとんねんと言つててん。まあ浮かされとるんやろなあ。帯広では神主さんに出来ましてね、ポツポツポツ飛びよつて、面白かつた。もう北海道回る間、そんな連中がついて来ますねん。北海道

いうたら純朴な所やなと思つてね。結局、1週間の予定が半月近うおりました。

なんか知らんけど行つたところで行つたところそんな現象がありますね、これ妙に。いつからいつに分かんけど。

竹内 この頃は余り無いわけですね。

法主 ある程度、波があるような気がするね。

竹内 違う形で現われてるのかもしれないね。

法主 まあ大分面白い話やけど。

竹内 僕も今まで喋つたことが無いような事喋つたし。

念の力と集中力

竹内 私はどうも体が弱かつたせいか、ギリギリ自分の体が動くまで、いくら決心しても決心だけでは動かないんですわ。自分の感じではなんとなく行くのがイヤだイヤだと後ずさりしながら入つて行くみたいところがあつて。先は全然見えんのやけども、どうしてもそつちへ行くよりしょうがない方ばかり行くという……。

法主 誰かが指導してるものがあるんですよ。

竹内 そういう感じですね、私は。あとから考えて、いつも。それは一つは体の感じなんだけれども、体というのは非常に微妙なものだという信仰に近いものは持つてゐるんですね。

幾つのか忘れたけど、戦争中で灯火管制というのがあつたでしょう。弓をやつてゐる内に夕方になつて、暗くなつても20分位灯がつかないんです。弓というのは、4本ずつ5回射るんです。それでその時、4回まで、15、6本まで1本も外れんわけです。20本全部当たることは「20射皆中」言うて滅多に無いんですね。私も19本とかはあつたんですけどまだ全部当たつた事が無いので、その時

にね、もつたないわけですよ。ところがが見えんでしよう。立ったままこう足を揃えて、それで射て、当たったのを友達に持って来てもらったんです。それがまた当たるわけです。その時初めて20本当たったんです。

自分のある状態がピタツと統一したら見えんでも当たる、という事は自分の中で実際に経験して分かるんですね。体、と言っても集中力という事ですけれども、非常に微妙なものだと思うんですね。

それと、もつと微妙な事があるんですけども。的がありますね、ポンと真中に当たると、そして次のが前の矢の羽のところに当たって矢がダメになつてしまふ、4本当たつて矢がダメになつてしまふという事が何ぶんあります。自分でやつたから珍しいと気がつかないでいたけど、大分経つてから人に話したら驚いてた。真暗闇で矢が当たつたというのは、仙台の方か何かで、他におるそ
うですけどね。

法主 そりや珍しい話やね。私も弓をやつてる人、かなり知つてゐるし、よう見てますけど。

竹内 矢というのは大ざっぱなもので、精密なものじゃないですね。

法主 羽の長短でも変わってくるし、節もあるしね。瞬間、瞬間で空気でも動いとおんねん。全く同じ状態って無いんやからね。

竹内　だから体、どこで精神と言うのか体と言うのか分からないけれども、それが非常に集中した時には、ちょっと何と言って良いか分からないような事が起こるという事は、自分では信じてるんです。

声が出る時なんかもうですね。喋るけど、声が出ないという人もいるわけね。声が出て来る時っていうのは自分の体の中にある統一感がサーッと出てきて、出た瞬間に体全体が変わりますね。

●竹内敏晴（たけうち・としはる）

1925（大正14）年、東京生。演出家。東京大学文学部卒。ぶどうの会、代々木小劇場＝演劇集団・変身を経て、72年竹内演劇研究所開設（～86年）。79～84年宮城教育大学教授。その後も「からだとことばのレッスン」に基づく演劇創造、人間関係の気づきと変容、障害者療育に取り組みつづける。2009年9月7日死去（満84歳）。

著書に『ことがばが劈かれるとき』（思想の科学社、のちちくま文庫）『声が生まれる』（中公新書）『生きることのレッスン』（トランスビュー）『「出会う」ということ』『レッスンする人——語り下ろし自伝』（藤原書店）など多数。

(『セレクション 竹内敏晴の「からだと思ひ」全4巻』
〈藤原書店〉による。)

三好君なんかは、始めから声はよく出た人なんですよね。

そういう事については信じてるみたいな所がありますね。

法主 矢が矢に当たるなんてちよつと無い話ですね。

竹内 昔の伝説にはあるんだけど自分で何べんか経験してるものだから不思議なことは思わなかったですね。ある状態までいけば必ず起こると、そう思ってるわけ。伝説にあるような事は、結局どこかで起こったことなんじゃないですか。人間の頭で考えたような事というのは滅多に無くて、宮本武蔵が箸でハエをつかまえるという、あれは、現実にはやれた人がいるんですね。大正時代の

剣道の名人で。

法主　そりやおるでしょう。そういう人は念の強い人ですよ。ハエが念の力で飛べなくなるんですよ。そしてゆつくりつかまえられるわけです。ちやうど、あのヘビが雀を食べるんやからね。あれも一緒や。飛んだらええやろ、それが飛べへんもの。うちの桜なんかで何回かヘビに雀が喰われとるの見てるよ。不思議なほど、念の強いやつやなあ、ヘビというのは。その代わり全部口の中に入ってしまうまで一時間以上もかかっとる。始め頭だけ入っとんねん。時間と共に段々入っていく。あれ口の中で溶けていくんやな。ワシ一回、途中で抜いて見た事あんねん(笑)。私はまたそんなんよう出くわすんか知らんけど、なげしの所でネズミすくんどって、青大將行きよんね。逃げたらええのにネズミ行きよらんね。

竹内　自分のためにものを殺すというのは人間だけですな。

岸田 食べないで殺すというのは人間だけですか。

法主 そんな点、動物の世界は整然としたものがありますね。腹が大きったら横でエサ走つとったかてもう知らん顔してるものね。

岸田 人間のところで、それがちよつと切れてるんですね。

法主 けど人間の念の力というのはかなり強いものがあるんですね。テレビでやっとなさそうやなあ、念の力で水を湯に沸騰さすの。滅多に水と湯とパツと入れ換えるような事してへんやろと思うけど。

人間の集中した時の念の力というのはかなり力があるから、例えば矢1つでも、弦の力だけで飛ぶんやなしに、打つ人の念が、あの的、という念が、持って行くんとちがうかと思いますね。

竹内 そういふ風に考えた方が納得がいきやすいかもしれないな。

法主 昔の弓の名人で、空飛ぶ鳥が、羽をパツと上げた時に、羽だけを射通したとかね、話としてあんなから、誰かやった人がおるんやろね。

竹内 大体、日本の弓というのがあまり飛ばない弓です。飛ぶだけやったら100メートルぐらい飛ばしますが、狙って当てるとなると20メートルぐらい。弓の話が出たからついでに。私は24時間弓を射て1万本射たという記録を持つてゐるんです(笑)。昭和18年の寒稽古で。

法主 終戦で20歳だとすると……。

竹内 17歳頃です。ちょうど法主さんが「大和へ帰れ」と言われた頃の話ですね。

岸田 まだあまり喋れなかった頃ですね。

竹内 耳が聞こえてから2年目ぐらいでしたか。高等学校に入った時に、コンパというのがあって、皆、立派な事を喋るんだよな。僕は口がきけないからもう非常に苦勞しました。

岸田 片方で弓をやってたわけですね。

竹内 弓というのは集中力の問題だからかえって耳の聞こえる人より良いかもしれないですね。弓を始めたのは13歳ですね。16歳で3段で、全国最年少の3段でした。4段になると試験の時に高等学校へ入って、価値感が変わりまして(笑)。

集中力と念とが、どういう風につながっているのか、集中力が強いとか強くないとか言うのは生まれつきなのか訓練なのか、そういう事がよく分かります。芝居の方で最近やってると、集中力というのがポイントやという感じがとてもするんです。ただ自然に出てくるというのとかね、集中力というのがどういふ風になるのかなあ。(続く)

大倭会一泊文化行事感想文

やつとたどりつく

青山 元子

10月19、20日大倭会文化行事一泊旅行に参加。19日、雨が降りそうな空を見上げながら傘を持ち家を出る。8時30分予定通りに参加者26名を乗せて、愛媛へ出発。

第二阪奈道路に入る前にあつゝ法主さん、神さん方に挨拶するのを忘れたと気づき「行つて来ます」と挨拶、再び隣の文ちゃん和雑談に花が咲く。明石大橋、淡路島を通り、四国に入り14時半予定通りに崇徳天皇白峯陵付近の駐車場に到着。

雨雲を眺めながら、御陵までの道のりを考え、行くかどうか躊躇する。出発前から結構距離があると聞いていたので……。しかし義姉の波留茂を乗せた車椅子を押している義兄(正知)の姿を見て、「やつぱり行かないとな」と奮起していざ出発。進むうちに、先のグループから5人程の女子がはぐれ、こちらだと進んだ道の最初に長い階段があり必死で登り着いたところは千

手観世音菩薩様。私



瀬戸内しまなみ海道をバックに

たちは大倭会の人たちは誰もおらず、ここじゃないの?……息をゼーゼーしながら周りを確認していると、この長い階段の登り口で「そこじゃないよ」と義兄の正知の声で、ホツとするやらしんどいやらで、千手観世音

菩薩様に「お邪魔しました」と手を合わせ、再び長い階段を降りる。教わった道を辿りやつと崇徳天皇陵にたどりつく。

曇天のせいか辺りは薄暗く鬱蒼として重く怖い感じを受けた。お参りをして集合写真を撮りバスに向かう。少し下ると道の左手に地元のみかんが袋詰めで売られていたが、ふーんと通り過ぎる。そのみかんを二袋下げて旦那の法義が、なんか嬉しそうに「買ってきた」と言いながら追い越して行った。

その後宿泊先の道後温泉へ。道後館は、玄関を入るとお香漂う、心身共にくつろげるお宿で、お食事もお手が入りていとも美味しく堪能した。宴会は、昼間の疲れを忘れさせてくれるような、楽しいひと時でした。

翌朝しっかり朝食をいただき、今治市のタオル美術館に向かう。色んなキャラクターのタオルや多種多様のタオルが展示販売されて、短時間では全て見る事が出来ないとお土産選びを優先してしまった。でも、たまたまこの期間にハワイアンキルトの展示があり、目で見て直に触れて、耳で聞いていただけのハワイアンキルトに出会えた事は貴重な時間でした。

その後、福山で昼食をいただく。あとは大倭会。数回のトイレ休憩を取り19時過ぎに到着。雨具を使う事無く無事大倭会に帰る。色んな意味でハラハラドキドキがいっぱいの旅行でした、参加された皆様に感謝します、ありがとうございました。あく楽しかった。

白峯御陵とアサギマダラ

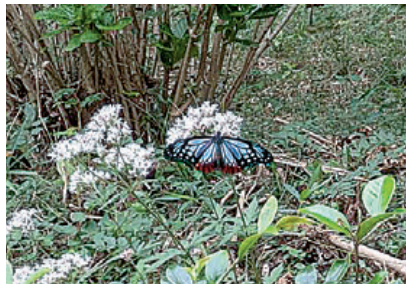
大倉 ひろ枝

10月19日8時30分、(大倭)藤の木台のロータリーで中型観光バスに乗り、道後温泉方面への

旅に出発しました。

20代の頃、司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読み、明治に生きた主人公三人の若者（秋山好古、秋山真之、正岡子規）の出身地である伊予の国・松山を訪ねたいと思っていましたので、今回の旅行をとても楽しみに参加しました。

往路の車中では、当時父と私と姉（湯浅晴子）で日露戦争、特に乃木大将について激論したことを懐かしく思い出しながら、車窓からの景色を楽しみました。



午後、白峯御陵を訪れました。御陵は静かで見晴らしの良い山の斜面にあり、全員で参拝しました。御陵を後にして数分間下ったところでふと左手の山肌を見ると藤袴が咲いており、その回りを一匹のアサギマダラが優雅に舞いおりて花

に静かに止まりました。羽の模様は美しく、写し終わるまで羽を広げといて！となかば祈る気持ちで私達は息を潜めて写真を撮りました。まさかここで会えるとは思ってもよらず、すごく興奮しました。渡り蝶のアサギマダラは何処から来て何処に行くのだろう。無事に長い旅路を終えてほしいと願いながら、そしてこの美しい景色を見せて下さった崇徳上皇に感謝申し上げます。

宴会では恒例のカラオケで盛り上がり、部屋では思い出話に花を咲かせました。翌日今治タオル美術館を見学後、しまなみ海道・山陽道を走り帰路につきました。

崇徳院に思いを馳せる

林 修三

令和7年10月19日午後1時頃、四国讃岐にある崇徳院の御陵である白峯陵に大倭会総勢26名（お一人はバスの中で）の方々が参拝される姿があった。崇徳院は矢追日聖法主と縁深き方である。法主著『ながそねの息吹』の中の「崇徳院の招きに応じ讃岐へ再度まいる」の冒頭に次の文章がある。『新緑の香りを乗せた爽やかな風が頬をなぞ、木の間から燦々と照りつける名残の春陽を背に強くなりながらもむろに額づいたとき「かつての日の約束通り、私は今ここに再び訪れる好機に恵まれ、この度の明るい穏やかな崇徳院に相まみえることを得て、誠に有難く、慶びこれに勝るものは御座いません」と、自分でない自分がこうした言葉をもつて喜びの挨拶を交わしていることを私は知った。

私は「ああ、来てよかった」と口走ったとき、感きわまつた意味なき涙だけが止めどもなく溢れ出るばかりだった。

（『ながそねの息吹』198頁）

本紙連載中の「神通力如是」には法主の過去世のお一人が源為朝であることが、その妻白縫から語られており、保元の乱の折、父親である源為義とともに崇徳院の側につき、戦いに敗れはしたが、江戸時代に出来た『椿説弓張月』等によって、その折の為朝の活躍は過去の日本人の多くが知るところであった。乱の後、伊豆配流となった為朝が伊豆を抜け出し白峯陵に参る話や、白縫も単独白峯陵を訪れる話もある。また、白縫と再度九州で巡りあった為朝やその一行が京の都に舟にて向かい瀬戸内海を渡る折、嵐にあい一命を落とす寸

前、崇徳院の命を受けた天狗霊達に救われる話もある。このように崇徳院と為朝主従の絆は深く尊い。先程冒頭に引用した文章の中の「自分でない自分がこうした言葉をもつて喜びの挨拶を交わしていることを私は知った」の一文は、その意味



がある。深い恨みを持ち「願わくは。大魔王となりて天下を悩乱する。謹みて五部の大乗経を以て悪道に廻向す」と血書して果てられたという崇徳院の御心を汲み取り、和の光を奉じる大倭の皆様が単なる観光ではなく、大勢で心安く参拝されたことは、誠に喜ばしいことであつた。

最後にまた、そのことを「喜んでいる」と杉本さんに告げられたという院のお言葉を添えてこの一文を終わりたい。

崇徳院余談

大倉 有宏

教務本庁2階に置いてあつた生母さんの神託を記した『兜率天諸神託宣及実相録』の中で、崇徳院は、スサノオの霊統であり、さらに崇徳院の苦悩をもって転生したのが大正天皇である旨が記されている。ここに法主（源為朝）と崇徳院の関係が伺われる。

法主・言の葉



宗教という言葉が生まれたのは人間が自然の心を忘れたからだ。

新シリーズ「私と大倭」(第4回)

垣根をとり岩戸をひらく

出口 三平

大倭との出会い



と主と 大倭や矢追法
主のお名前など
主と主を知ったのは、
平成3年10月、武術家の甲野善
紀さんからであ
った。今になる

と、神さまからの導きだったのだと思う。

実際に奈良の紫陽花邑に出かけたのは、1988年(昭和63年)の6月30日、たまたま夏越の祓いの日であった。いい日で不思議な日だった。生涯の友・石垣雅設さんとも出会えた。

当時、私は亀岡で出口和明さん(出口王仁三郎の孫)や大勢の信徒仲間たちと、教団の改革運動に没頭し、3年余が経過したころだった。

出口和明さんが書いた『大地の母』(全12巻)

で、私は魂を救われていた。その大本草創期のドキュメント小説のなかの出口直、王仁三郎にゾッコン惚れたということだろう。虚無的な思いばかりだった学園闘争時代の混乱のなかから、新生を求めて大本教団に身を投じた。霊界を見聞きするようなことは皆目できないが、不思議な縁には恵まれていたようだ。祈りや思いがあれば、どうにかなるもので、いつか大本の仲間の一人に加えてもらっていた。

憧れの王仁三郎の教団ではあったが、しかしなにか違っていた。上品で整っているようだが……

とか、ネガティブに言いだすとキリがないが、以前から燦々としていた内部抗争が表面化し、「大本第三次事件」と呼ばれる紛争が始まった。教団離脱勧告、誹首や裁判……と、あの王仁三郎の世界はどこに……というような時でもあり、甲野さんがよく行かれていますという、なんだか懐かしそうな大倭の世界に触れてみたくなった。

初めて邑に行つたその日、「あんたの後ろに、三体の霊人が……」と、霊視のできる人から声を掛けられた。小生には残念ながら何も見えないが、その体つきを聞くと、出口直開祖、王仁三郎聖師、澄子二代教主だった。大本と大倭、縁があるんだろうなと思った。あの日から37年経つたが、今は私の中ではうれしい確信になっている。

霊犀通う大倭と大本の世界

おおもと(大本)、おおやまと(大倭)と、名前からして似ている。王仁三郎は「瑞月」と号し、矢追法主は「日聖」の名を使われている。月と日と、仲よしのペアネームという感じだ。私のなかでも、関わるうちに、王仁三郎の大本、矢追法主の大倭、その共通共有する世界が、次第に浮かび上がってきた。「スサノオの世界」を日聖法主のなかにも感じはじめていく。

法主の書かれたもの、談話などに触れるうちに、いろいろ判ってきた。スサノオの系譜であるニギハヤヒが、丹後半島から紀州熊野あたりまで、近畿圏を治めていた時代、その神威のもとで、歴代

のナガソネヒコが「やまと」を長年豊かに平和に治めていた。そこに九州からニギ系の神武が豊かな「やまと」を目指し、神武は国を譲ってもらふことにはなるが、その渦中、ナガソネヒコは理不尽な処刑追放を被る。ナガソネこそ「やまと」の主であつたのに、今なお逆差別扱い。ニギ系の神武一統は、その後、いい日本社会を開いたのか! どうなんだ! と、劇画的にもいい感じが残る日本史のその後である。

「やまと」の徳政を長く続けてこられたナガソネの旧跡地で法主は生誕されている。大倭神宮のあの場所が、日本の本当の祖廟の地だということ、ナガソネの豊かな息吹を再び再興させたいとの法主のその祈りは、王仁三郎の世界と霊犀相通じるものがある。

丹波はニギハヤヒの地であつた。丹後一宮の籠神社の祭神はニギハヤヒであり、この神社の奥の院は若狭湾上の冠島である。この島は大本の主神である国祖・クニトコタチ(豊受神)が封じられていた島であり、この島開きが教団史の最初の神業であつた。王仁三郎はスサノオを生命とし、「わしはニギハヤヒだ」と呟いたり、ナガソネヒコのように、その真心を察してもらうこともなく、



若狭湾の冠島沖で、前列中央が筆者、苛烈な国家弾圧を二度にわたり被つても、神武や崇神についての言及、丹波の豊受信仰への深い思いなど、その内面の多様さは、まだこれから光があてられてゆくことだし、私の課題でもありそう

ふるさとの「やまと」紫陽花園

大倭は昔からの故郷であったわけだ。何度も大倭には出かけたが、大倭の地に帰れば矢追法主があられた。今もその感覚が湧く。

しかし、法主との初対面の時のハッキリした記憶はない。いつのまにか、常連の客にはなっていた。邑は、私には友人たちとの再会の場でもあった。石垣さんが主宰し、各地で開催された「野草塾」には、何度も出かけたが、山尾三省さんに会えるのもうれしかった。大倭で開かれた野草塾では、晩年の法主が参加され、法主も楽しんでおられたようだ。

大倭に行くと、野草塾の友達にも会えた。まきになつかしい故郷だった。関わっていた大本教団改革は簡単なものではなかったが、亀岡に新たな活動拠点「愛善苑」を開いていたので、そこも交流の場になっていた。

1997年、私は宗教教団活動に見切りをつけ、綾部に帰り、仲間と田んぼづくりなどもしていたが、大倭の田植え・稲刈りには何度が誘い合っ出て出かけていた。作業後の道辺での直会(食事会)は、嬉しい時間だったし、忘れられない思い出だ。

法主の話法

法主との初対面の記憶は思い出せない。しかしフツと出てくる法主の思い出は多い。自然で気楽な雰囲気が好きで、側にいるだけで幸せだった。見田宗介さんも「日聖さんは、そばにいるだけで、話はしなくても、魂がすきとおってゆくような人でした」と法主追悼の言葉を残されている。そうだったなと思う。



深い王仁三郎の出口、沖の砂高内海、瀬戸の縁と大倭本宮と緯度があるということ。島神と緯度があるということ。

祭典後のお話ぶりや、相談者相手に談話されている様子などは、近くで雰囲気を感じるだけで、こちらまで癒されるおもいだっ。霊的な相談事には、会話中に手の指を微動させて霊波長を合わされていたのだろうか、不思議な世界があるのだな……と、シンとした感覚にみちびかれた。千里先のことも目前のこととして語られ、すでに亡くなった人達の思いや消息を隣人のことのように伝えられる。三次元に囚われた頑なな頭が穴があいて風が通る感じだった。祭典後のお話も楽しめた。「ワシは糞も垂れるし、猫も雌が好きや」とか「宗教やるのは嫌やな、出口さん」とか、ほんとに自然に話をされるので、肩の力が抜け、気楽になった。

垣根をとり岩戸をひらく

法主の書かれたものは、活字化されたもの大半は読んだと思うが、味わうのはまだこれからという感じだ。

阿木幸男さん、野本三吉さん、岸田哲さん達の「三人の会」が、21世紀を迎える2000年11月

に大倭で開催することになったが、この時から「賑栄い塾」という会の名がつけられた。ニギハヤヒの御名に因むという。各地で開催され、ほとんど私は参加したと思う。沖縄、水俣、秩父、富士、佐渡……と、各地で世直しが語りあわれた。第15回2010年秋は、丹波の大江山で「丹のく」からへもうひとつの日本を考えると題し、晩夏の暑い中、三泊四日の集いであった。古代丹後のニギハヤヒ、ナガソネの霊界とも響きあえと、私もスタッフの一人として関わった。賑栄い塾の場は、私の中では大本、大倭の邑の世界だった。

味の世界から

法主の論考のなかに「武」についての論考がある。(『やわらぎの黙示』167-170頁)

王仁三郎の霊界物語12巻に、スサノオの三人の娘が遂行した「戦い」が描かれている。容赦なく殺戮をしかけるアマテラス軍に、スサノオの娘達(三女神)は無抵抗で立ち向かう。彼女らの武芸、農芸、芸樹への思いの底力が、迷うアマテラスを救ってゆく、そんなドラマであり、王仁三郎の祈りの世界だ。技術的には進歩しているようではありつつ、従来のな「ある」「べし」の閉鎖社会をいかに破るか。そこに法主の言われる「味の世界」があると思うが、古来日本、ニギハヤヒの「やまと」には、それが豊かに生動していたと信じていたい。

王仁師のもとには合気道開祖の植芝盛平、日聖師のもとには国井道之(善弥)の双壁が侍した。不思議な配置だが、神話的には、この三女神の働きだったのかと思う。味の世界の道も困難が多いだろうが、その道のなかで、「ある」「べし」の孤独頑強は崩されて、神愛により天の岩戸も開かれてゆくのでは……と祈りを深めたいと思う。

あじさい日誌

11月8日 今年の大倭会文化講演会講師、盛口満さんが来邑されました。本番は明日(9日)ですがご本人は沖繩からお出のため、前日から紫陽花邑で一泊されました。

この夜は屋久島の手塚賢至さん夫妻、大倭会スタッフなど講師有縁の人たち約15名の大倭会館での夕食会になりました。

11月9日 あいにくの雨でしたが、午後1時から大倭拝殿において「沖繩からの自然と人間のあり方を考える」と題して盛口満さんの講演が行われました。

11月13日・14日 ハンセン病療養所内にあった高校、邑久高校新良田教室の6期生4名が交流の家で宿泊されました。キャンパー3名でささやかな歓迎会をし、翌日、奈良観光に出かけられるまで一緒しました。「帰ったら交流の家のことを宣伝しておきます」と、大変喜んでくださいました。

11月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午前9時半から大倭会館や教務本庁周辺で富雄南放課後子ども教室の児童11名が「奈良の鹿のためのどんぐりひろい」をしました。

11月16日 午前9時から奥津斉庭の金剛大龍王さんの、通称

「龍神さんの寝床」の藁敷が行われ12名が参加しました。

11月22日 来年度の文化講演会の講師予定の加藤登紀子さん・舞台監督の高橋大地さんと大阪の天満橋でFIWC関西委員会の湯浅進さん、戸張岳陽さんと大倭会の岸田哲さんとで打合せを行いました。

11月23日 午後2時から、今年最後の月次祭が大本宮拝殿において行われました。

午後4時から大倭会館において大倭会役員会が開かれました。

12月1日 松本直之・大城由香理さんに案内され岩手県奥州市の佐藤学さんと京都府南山城村の新田とよ子さんが来邑され、杉本順一さんと歓談されました。佐藤・大城・松本のお三方は会館で一泊されました。

交流の家で「みずのわおつぺ」主催の、話合いや歌や食事や手作りの作品や作物を交換するイベントが開かれ、大倭関係者を含め10数名が参加して楽しめました。

12月2日 午後2時過ぎから松本直之さんのお声がけで、高槻市の兼平真由美さん、高島市の白井智恵子さん、越谷市の西山律子さん、杉並区の藤野晴美さん、伊東市の岡村好子さん、大和郡山市の森田礼子さんが来邑、本庁で杉本順一さんと歓談。

お話の流れで「祖霊祭」の話題から、6名全員が大倭会に入

会されることになりました。

12月4日 午後2時から大倭神宮において金鶏祭が行われました。茨木市の安達紀子さん、葛城市の塚田見紀さん、奈良市の野村学、奈美子さんが参加されました、祭典後紫陽花邑に來られました。

12月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

夜6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では11月24日 19回目の安全祈りの日を迎え、各施設にて理事長からの文書を読み公私ともに今後無事故を誓いました。

(菅原園) 11月19日 午後から2階交流ホールにて喫茶サロンを行いました。

11月23日 午後より会議室にて映画「35年目のラブレター」を観ました。奈良の夜間中学が舞台になっており、自分に関連付けて涙する利用者もいました。

(須加宮寮)

11月25日 書道クラブを行いました。12月に心身障害者作品展が行われるため、出展される方は真剣に取り組まれました。

12月2日 奈良県心身障害者作品展見学に参加しました。

(長曽根寮)

11月12日 (デイ) 壁に大きな木を作り、皆さんと一緒にモミジ

やイチヨウなどの葉を壁いっぱい貼りました。

11月19・23日 (特養) 玄関前にて紅葉見学をしました。移動が困難な方はフロアのベランダから見ていただきました。フロアには紅葉の設えを飾り付けて季節感を感じてもらいました。

(茂毛路園)

11月28日 定例懇談会を開催しました。参加者の中に今日がちょうど誕生日の方がおられ、参加者全員でハッピーバースデーの歌を唄いお祝しました。

あんない

*年始祭(大倭神宮)

1月1日(祝・木) 午後2時から大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)

1月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

矢追美壽紀さんが帰幽されました



令和7年11月26日午後1時50分に社会福祉法人大倭安宿苑理事長の矢追美壽紀さんが帰幽されました。美壽紀さんは昭和15年9月7日法主の次女として誕生。昭和22年10月30日法主夫妻と3人の兄妹と共に庄山の美

*大とんど

1月11日(日) 午前9時半〜10時半(厳守)、大本宮西の齋庭にて注連縄や門松等を火にあげる神事です。なお、天候による変更もあり得ます。

針金・プラスチック等、不燃物は必ずはずしてきて下さい。

*大倭会主催祝会

1月11日(日) 午後2時より大倭拝殿にて。

※自分が気づかぬうちに、己の心の曇りが厚くなっているだろうか!—そんな自分に気づかせてくれるいいチャンスになるかもしれません。気楽に集まって、話し合いませんか。

*月次祭(大倭神宮)

1月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

1月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

家から須加の聖地(紫陽花邑)へ遷る。昭和31年5月10日社会福祉法人大倭安宿苑成立。その事業開始とともに、高校に通いながら救護施設の仕事を手伝う。昭和39年協義男さんと結婚。男の子2人(明昌、明孝)を授かる。昭和54年3月1日夫矢追義男帰幽。これ以後も志の変わることなく、法主の言われる宗教実践としての社会福祉の道に生涯をかけて邁進されました。